



えど友ホームページ
<http://www.edo-tomo.jp/>

えど友

EDO-TOMO

No.49
2009
(平成 21 年)
5 - 6

江戸東京博物館友の会会報

目次

平成 21 年度 定期総会のご案内	1	「えど友研究発表会」発表者募集	6
友の会セミナー『幕府崩壊後の幕臣たち』	2	えど友サークルだより	7
友の会セミナー『江戸っ子とは』	3	会議・会合日誌	7
特別観覧会『薩摩焼』展	4	えど友プラザ『百の夢かなう日』	8
江戸博クリップ『雛祭りのこと』	4	落語で江戸散歩…⑧【長屋の花見】	10
見学会『江戸城周辺の探訪—その5(外濠)』	5	催事案内	11
【古文書講座】 講師変更 / 本年度講座の概要	6	会員優待のお知らせ	12

平成21年度 定期総会のご案内

5月 22 日(金) 午後 0 時 30 分開始
～竹内館長による記念講演も～

江戸東京博物館友の会は平成 21 年度の定期総会を来る 5 月 22 日(金)の午後 0 時 30 分から開催いたします。どうぞ奮ってご参加ください。

友の会は平成 13 年に約 600 名の会員で発足しましたが、その後会員も順調に増え、本年は 1,700 名を超えるにいたりました。ひとえに会員の皆様と江戸博のご協力の賜物と、厚く御礼申し上げます。新年度も多彩な活動を計画しておりますが、会員の皆様のご希望やご意見を取り入れ、一人でも多くの方々の参画と協力を得て、一層充実した年にいたしたいと考えています。

定期総会は会員が一堂に会する、年に一度の機会で、過去 1 年間の活動を振り返るとともに、本年度の活動について率直な意見を交換する場であります。同封の議案書をご検討いただき、多くの会員の方々がご出席くださいますよう、お待ち申し上げます。

当日の予定は次の通りです。

■平成 21 年度友の会定期総会

日時 5 月 22 日(金)午後 0 時 30 分
場所 江戸東京博物館 1 階ホール

●主な議案

- ・平成 20 年度事業報告並びに収支決算報告
- ・平成 21 年度事業計画案と事業予算

案について

- ・新役員の選出

■記念講演会

総会に引き続き、江戸博館長竹内誠氏による記念講演会がありますのでご期待ください。

■懇親会

記念講演会終了後、午後 4 時より本館 7 階の「桜茶寮」にて懇親会を開催いたします(会費 500 円)。会員が交流し、懇親を深める良い機会です。総会出席の皆様はぜひご参加ください。

会員資格継続手続きのお願い

- 会員資格の有効期限は、入会の日から 1 年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」を郵送いたしますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、1 人でも多くの方の継続をお待ちしています。
- 継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

「江戸幕府崩壊後の幕臣たち」

講師 安藤優一郎さん（歴史家・文学博士）



幕末というと、薩摩藩の西郷隆盛や土佐藩の坂本龍馬たちがヒーローとして描かれることが多い時代です。しかし、明治維新により敗者に転落した幕府側から見るとどのような歴史になるのでしょうか。今回は、彰義隊の戦いなど大事件の現場に直面した山本という一人の幕臣が書き残した自分史を通して、歴史教科書では描かれない幕府崩壊後の武士の生き様を見ていきます。

山本政恒という人物

山本政恒は上野の不忍池の近く、御徒町に生まれ、代々将軍の警護などにあたる「御徒」を務める御家人でした。

徳川慶喜の恭順後、それに不満を抱く幕臣たちによる上野戦争が起こります。彰義隊で華々しく散っていった人々の歴史が目立ちますが、大半の幕臣たちは戦争の状況を様子見しているだけの「中立派」だったようです。山本もその一人で、彰義隊には参加しないものの、新政府軍にいい気持ちがあるわけでもないので、幕臣たちの結成するグループのひとつである「遊撃隊」に属し、上野からは少し離れた大名屋敷跡に集まって戦況を見守っていました。その後幕府側は負け、翌日山本は戦場にほど近い自宅へ戻るのですが、その時の様子を記録に残しています。

一面血の海の生々しい戦場の様子とともに、上野の山にも行こうと思ったが、どんな格好をしていようが武士に見られるだろうから、危うきに寄らず、なるべく外に出ないようにした、と正直な気持ちを書いています。当時山本は30歳手前。血氣盛んな年代ですが、こういう武士もいたということが分かる点でもとても貴重な史料です。

徳川家の大リストラ

幕府敗北後、新政府は徳川家を静岡藩70万石に封じました。もともと

800万石あったと言われる所領の10分の1以下ですから、非常に過酷な処分です。そうなると徳川家に多くの家臣を抱える余裕はありません。幕臣たちには3つの選択肢がありました。①新政府に仕えること、②農業・商業を始めること、③無祿移住です。幕臣たちのほとんどは③を選択し静岡藩士となりました。当然ながらその生活は苦しく、その日のご飯もままならない状態で大半は餓死寸前の状況まで追い込まれます。

一方で、牧の原台地の茶畑開墾や、江原素六の土族授産など、静岡藩の新しい国づくりに尽力した人たちもたくさんいます。徳川家は元中央政府ですから、藩としてのレベルは他の藩に比べ抜きんでいました。新しいものの考え方や知識を持った人がたくさんいて、静岡学問所や沼津兵学校など最新の教育施設もつくられます。このような動きの中に、日本の資本主義の礎を築いた渋沢栄一もいます。彼は商法会所の設立など、静岡藩でもさまざまな活動を行いました。新政府はこれに注目し、静岡藩から多くの人材を引き抜き、新たな時代が築かれたという側面もあるのです。

幕臣の意地を貫く

さて、幕府崩壊後山本はどうしたのでしょうか。彼も多くの幕臣同様、無祿移住を選択し静岡藩士となり、農業などをやりながら生活していたようです。その後廃藩置県があり浜松県（のちの静岡県）の役人になるものの仕事でミスを犯し免職、1年ほど江戸で内職生活を送りますが、御徒時代の同僚の口利きで熊谷県（のちの群馬県）で教育関係の仕事に就きます。それが35歳の頃で、以後50歳になるまで群馬県職員として前橋で生活します

が、江戸に戻りたいという気持ちはずっと持ち続けていました。それは山本だけでなく、当時各地に離散していた幕臣たちも同じ気持ちだつたと思います。

その気持ちが一気に爆発するのが明治22(1889)年に東京で開催された「東京開市300年祭」です。徳川家康の江戸入城300年を記念するイベントですが、幕臣たちの江戸への郷愁を思い起こさせるきっかけとなったのです。当時江戸や徳川幕府の話をするのは反政府活動としてはばかられていましたが、このイベントが政府公認の形で行われたため、幕臣たちはグループを結成し、自分がこれまで見たものを書いて発表するという活動をあちこちで行いはじめます。

山本は榎本武揚が会長を務める「旧交会」というグループに入会します。旧交会では、春と秋に上野東照宮の社務所で総会を開き、お正月には徳川の屋敷へ行き年賀のあいさつをし、酒肴を賜るということをやっていたようです。江戸時代の儀式の真似をすることでお互いの気持ちをつなぎ、昔を懐かしんでいたのではないかでしょうか。

そのうちに、徳川家の家臣としての気持ちが失われていないことが山本の心に浮かび上がります。徳川幕府を悪く言うような風潮がある中、自分自身が見たものを書き残しておきたいという気持ちがどんどん沸き起こり、自分史を編纂するまでに至るわけです。

そして昭和60(1985)年にその自分史が『幕末下級武士の記録』として出版され、一般に知られるようになりました。この自分史を通して、幕府崩壊後の幕臣たちがどのような生き方をしていたのかを私たちは知ることができます。これまで知っていた歴史とは少し違っているかもしれません、これも事実であり、歴史の面白さを改めて感じてもらえばと思います。

【記録】文・写真：広報部会・中里弘子

「江戸っ子」という言葉

「江戸っ子」という言葉はいつから使われるようになったのでしょうか。「江戸っ子」と近い言葉に、江戸生まれ・江戸育ち・江戸者・江戸人・江戸衆・お江戸さんがあります。最も使われたのは「江戸生まれ」という言葉です。また「江戸者」という言葉もよく使われました。安永期(1772~81)の川柳に皆さんもよくご存じの「江戸者の生まれ損ない金を溜め」があります。現在まで残っている資料に「江戸っ子」という言葉が最初に出てくるのは、明和8(1771)年の川柳「江戸っ子の草鞋を履く乱がしさ」です。したがって、その少し前から使われるようになったと思われます。

その背景に、庶民が「家」を持つようになつたことがあります。江戸時代初期は男の独身者が多かつたのですが、元禄を過ぎた頃から江戸の庶民も家を持って家督を譲渡するようになりました。そして、江戸生まれを意識するようになり、「江戸っ子」という言葉を使うようになったと考えられます。

江戸っ子の身分と居住地

次に、「江戸っ子」はどういう身分・職業の人をいったのでしょうか。

天明7(1787)年刊の『通言總離』^{まがき}で山東京伝は「金の魚虎しゃちほこをにらんで」などと条件を上げ、江戸城近くで生まれ裕福に育った庶民が「江戸っ子」だと言っています。

吉原の客は元禄期まで上級武士ばかりでした。時代が下がるにつれ庶民が経済力をつけ、元禄期以降は材木商・札差など、富裕な商人も通えるようになりました。世の中は次第に世知辛くなり、吉原も値下げしたため、下層庶民も吉原に行けるようになり、遊里を題材にした小説類に大商人と貧乏人の摩擦が描かれるようになります。寛政12(1800)年刊、『風俗通』には、

「江戸っ子とは ～都市江戸の成立と発展～」

講師

赤坂治績さん
(歌舞伎・江戸文化研究家)

第79回 江戸東京博物館友の会セミナー
(2009/3/28)



裏店で育つた者を見下して、空威張りする大商人が登場します。こうして、時代が下がるにつれ下層の庶民も「江戸っ子」という意識をもつようになっていくわけです。

さらに、どこに住んだ人を「江戸っ子」といったのでしょうか。

江戸時代中期までは、日枝(山王権現)・神田両神社の氏子が住んだ地域、すなわち隅田川近くの下町に住む庶民を「江戸っ子」といいました。前出『通言總離』も將軍家の膝元の庶民と書いています。江戸城近くで生活する庶民は將軍家と同じ神社の氏子であることに大変な優越感を感じていました。

ただ、仕事を求め江戸に出てくる地方人は途切れず、庶民の居住地は広がります。江戸時代後期、幕府は地図に朱色の線を引いて江戸町奉行の支配地を定め(「御朱引き内」という)、南は品川、西は新宿、東は隅田川を超えて深川・本所・千住を結ぶ線、北は板橋までが江戸になりました。

「江戸っ子」の性格は江戸という都

市の性格と関係しています。参勤交代制度で江戸に単身赴任した諸大名の家臣・大概の宗派の僧侶・新都市建設のために集められた職人・諸国の商人が江戸に出した江戸店など独身者ばかりで、初期の江戸は男性が圧倒的多数でした。そして、圧倒的多数が消費者でした。要するに、江戸という都市は、女性が少なく、消費するだけの、殺伐とした都市だったわけで、その中で独特な文化が育っていきます。

『助六』と「江戸っ子」の気質

江戸時代の文化は遊里と歌舞伎を除いては考えられませんが、特に『助六』は「江戸っ子」の代表でした。

正徳3(1713)年、二代目市川團十郎が上演した『花館愛護桜』が『助六』の初演です。実は『助六』と揚巻は上方歌舞伎の心中物に出てくる人物です。その上方の作品を「江戸っ子」の好みに合わせて改変して上演したわけです。

当時、江戸の庶民が最も好んだ作品は曾我物で、2回目に上演した、正徳6(1716)年の『式例 和曾我』^{わからぎそが}から、『助六』も曾我の世界になります。鎌倉時代の曾我五郎が江戸時代の吉原で、助六を名乗って、親の仇を討つために宝刀を探すという変な話なのですが、「江戸っ子」は数ある芝居の中で最も『助六』を好みました。侠客の格好良さと遊女の意気地、侠客と遊女のダンディズムに共感したのです。

「江戸っ子」の気質については、多数の文献に出てきます。そこから浮かび上がる「江戸っ子」の気質を表すキーワードとしては、「負け惜しみが強い」「華やか」「軽妙」「洒脱」「快活」「向こう気が強い」「喧嘩早い」「威張りたがり」「気前が良い」「軽薄」など数多くあります。今後『助六』をご覧になる際にはそういう視点から見ていただぐとおもしろいと思います。

【記録】文・写真：広報部会・深尾恵美子

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2009/2/20)

「薩摩焼～パリと篤姫を魅了した伝統の美～」展



江戸博にて2月14日(土)から3月22日(日)まで開催された日仏交流150周年記念特別展「薩摩焼～パリと篤姫を魅了した伝統の美～」の友の会特別観覧会が2月20日(金)に行なわれ、90名以上が参加しました。薩摩焼がヨーロッパで高い評価を得た第2回パリ万国博覧会から140年目を記念した「薩摩焼パリ伝統美展」が昨年フランス国立陶磁器美術館(セーブル美術館)で開かれ好評を博しましたが、今回はこのとき出品された作品を中心約200点を紹介する展覧会です。

まず1階会議室で橋本由起子学芸員から「見どころおよび展示物に関する解説」がなされました。第2回パリ万

博に、日本から幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ対等の立場で参加、出品したという、幕末政治の転換動乱期のエピソードや、薩摩焼の多様性(古薩摩、白薩摩、黒薩摩、錦手^{にしきて}、金襷手^{きんらんて})等々についての解説、また、篤姫の義父島津斉彬が集成館事業として薩摩焼に力を入れていた関係で篤姫もまた多くの薩摩焼を所有していたこと、その15点のうち特に愛した錦手狗^{にしきていぬ}などが大画面で紹介され、実に興味深い解説でした。

その後1階展示室に移り、観覧会が実施されました。「プロlogue」では、第3回パリ万博の日仏陶磁器交換で日本側69点対仏側1点で交換されたという、話題のセーブル焼「瑠璃地金彩人物団壺」(1対)に出会えました。

「1. 豪華絢爛な薩摩焼—[世界に雄飛]」では、今回のパンフレットを飾る4人の唐子が大鼓を演ずる大型香炉「色絵龍文唐子三脚香炉」の輸出品としての秀逸な優美さにふれることができました。「2. 茶道の薩摩焼—[重厚な味の茶道具]」のコーナーには当時の茶人たちの思い入れを感じる釉薬をたっぷり厚くかけた重厚な作品群が並んでいました。

「3. 白薩摩と黒薩摩—[殿様と庶民のやきもの]」では、素地や釉薬の違

い、形態に多様性のある薩摩焼には藩主専用の白薩摩、庶民的で日用品に多くみられる黒薩摩があるなど、その対比が非常におもしろいと思いました。見どころとして、鷹にとらえられた猿のなんともいえぬ表情と赤いお尻がかわいい「錦手花鳥文鷹彫刻飾壺」、遠くタイのスワンロコロークの窯を原型とする作風を模した「宋胡録写し花生」など枚挙に暇がありません。

「4. 磁器の薩摩焼—[青白磁をみるような磁器]」では、18世紀後半に始まった堅牢な磁器生産(平佐焼、南京皿山窯、日本山窯)、その質感のすばらしさは「べっ甲釉酒注」などの作品に表現されていました。「エピローグ」では、薩摩焼がヨーロッパの焼物に与えた影響がよく分かるジャポニズムに感化されたフランス作家たちの作品(セーブル美術館蔵)が展示され、さらに現代の薩摩焼作家の意欲作が数多く並び感慨深いものがありました。

今回の特別展は大阪、鹿児島、そして東京が最後となりますが、参加した会員の「これはすごいね。想像以上だよ」の言葉通り、思いがけない感動に満った特別展でした。

【取材】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦



江戸博クリップ



「雛祭りのこと」

幼いころの雛祭りの思い出は、なにか悲しいものだった。旧弊な考え方の父が、頑として旧暦でしか雛祭りをしてくれなかつたからだ。友達の家にお雛様が飾られる頃、家にはお雛様の影がなく、桜の花が咲くころになってようやくお雛様を出してもらえた。しかもそれは親王飾りの立雛だった。

昭和30年代の東京近郊の田舎町では、お雛様といえば、やはり段飾りだった。雛祭りの歌にあるように、五人囃子^{はや}や三人官女がいたらいいのにと思つ

ていた。口に出すと、このお雛様はおぞいり内裏様だけで段飾りが買えるほど高いのだと母はいった。でも子供の私には、普通がよかったです。

時期も形式もちょっと変わった家の雛祭りが、改まったのは平成になってからのことだ。兄の長女に、初節句にあわせ兄嫁の実家から七段飾りが送られてきて、父も飾らないわけにはいかなかつたのだ。それで私の雛も一緒に出すことになった。

よくお雛様をしまうのが遅いと、お

学芸員 畑

麗

嫁にいくのが遅くなるというが、しまうどころか出すのが遅かったのだ。結果は目に見えている。晩婚だった。40過ぎて娘のお雛様を選んだ頃には、親王飾りが普通の世の中になっていた。私のと娘の二つ並んだお雛様、ちらし寿司と蛤の吸い物、菜の花の辛子和え、今年は歌のように着物をきてみようか。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸城周辺の探訪－その5(外濠)



各地に桜が咲いている3月29日に、今回が5回目（最終回）の江戸城周辺を探訪する見学会がありました。外濠を歩くのは3回目、当日の天候は晴、メトロ「溜池山王」駅の山王パーク前に集合した会員約170名が、順次小人数ずつ、説明者に案内されて出発しました。

首相官邸をうしろに歩きだすとすぐ南部坂、大石内蔵助や瑠泉院に思いをはせながら、桜まつりで親子連れがいっぱいのアークヒルズを抜け、桜が4、5分咲きのスペイン坂を上がり、警戒厳重なアメリカ大使館のそばを通過すると特許庁の建物です。かつて溜池は赤坂見附の赤坂御門から山王下を通り、この特許庁交差点付近まであった細長い大きな池で、江戸城外濠の一部として取り込まれていました。その堰から落ちる水の音がドンドンと聞こえたので「赤坂のドンドン」とも言われていたそうです。

邸内社だった金刀比羅宮

讃岐丸亀藩主・京極家の邸内社として勧請され、その後現在の場所に遷座され多くの参詣人があった金刀比羅宮を参拝、ここには朱雀、青竜、玄武、白虎の四神を取り付けためずらしい鳥居がありました。ついで、虎ノ門跡へ歩みを進めます。ここは江戸城外濠の見附門で、慶長年間（1606年ごろ）に作られた古い門でしたが、今はなく「虎ノ門」という町名のみが残されています。



▲金刀比羅宮にて

虎ノ門から歩いて日比谷通りへ左折してすぐの地点に立ちますと、右手にJRの高架線が見えますが、その高架線に沿った下が江戸城外濠でした。高架線をはさんで、手前に幸橋御門、向こう側に土橋があり、外濠はこの辺りで直角に折れ曲がり、山下御門に続いていました。幸橋御門内には松平（柳沢）甲斐守の藩邸がありましたが、明治政府はこの屋敷を移転させ、旧藩邸に東京府庁舎を置きました。慶応4（1868）年8月のことですが、明治27（1894）年に有楽町に新庁舎を建て、移転されるまで、この地に東京府庁舎がありました。松平藩邸から道路を隔てた北隣の薩摩藩邸の跡には鹿鳴館が建てられました【明治16（1883）年】。これが、新政府による西欧化政策の象徴的建物となったことはご存知のとおりです。

日比谷公園は陸軍の練兵場だった

古色蒼然としていますが、堂々たる風格の日比谷公会堂を見ながら日比谷公園に入りました。この日比谷公園には長州藩毛利家、肥前佐賀藩鍋島家等雄藩8家の屋敷がありましたが、明治維新によって、すべてとり払われ、その広大な跡地は陸軍の練兵場になりました。練兵場は明治25（1892）年に廃止、跡地は本多静六博士の設計によって、わが国初めての近代的西洋公園として開園されました。明治36（1903）年のことですが、その5年後には園内に西洋式花壇、野外音楽堂、公会堂が整えられています。

日比谷公園を出て、「君の名は」で一世を風靡した数寄屋橋に向かいます。ここには江戸城外郭の見附門があり、門内には南町奉行所や門の名前の由来となった御数寄屋町がありました。現在では、外濠はおろか橋も門の跡も完全に消失し、雜踏行き交うそばに「数寄屋橋」の碑がひっそりと残されています。



▲太田道灌像の前で

るだけです。ついで、晴海通りを渡って、有楽町駅前にある「南町奉行所跡」の石碑を眺めて、都庁があった東京国際フォーラムを歩きました。ここには色鮮やかなチューリップが飾られ、大きな建物の一角に皇居に向かって立っている太田道灌の像に敬意を表した後、鍛冶橋を通り、東京駅へ。長距離バスを待つ人々がいっぱいの駅前を歩いて大丸に入り、バームクーヘンを求める長い行列の近く、「はいそこですよ」と言わされたところに小さな「北町奉行所跡」の石碑を、発見です！

五斗、五斗、で一石橋

門も橋もとっくの昔に撤去され、名のみを残す「呉服橋」を過ぎると、北斎の絵で有名な「一石橋」です。この名の由来は大面白く、橋の北側に金座後藤家屋敷があり、南側に呉服商後藤家屋敷があり、五斗、五斗、で一石と呼ばれたそうです。そして、すぐ近くにこの日の終点「常盤橋門跡」です。この橋は天正18（1590）年に架けられ、江戸で最も古い橋のひとつで、架けられたころは浅草口とか追手口と呼ばれ、奥州街道と水戸街道へ通じる江戸五口のひとつでした。いまでは小さな公園となっていますが、そこにはまぎれもなく外濠がありました。「溜池」から約3時間、外濠があったところ、高層ビルばかりが立ち並ぶところを歩いてきて、この常盤橋でやっとほんものの外濠に出会えた江戸城周辺の最終回でした。

【取材】文・写真：広報部会・福島信一

【古文書講座】講師変更のお知らせと本年度講座の概要

ご好評をいただいている古文書講座ですが、中級編ご担当の小宮山敏和講師がご都合で退任されることになり、代わって田中潤講師が新任となります。これにともない各講座の担当は入門編・小松賢司講師、初級編・田中潤講師、中級編・長坂良宏講師となります。3人の先生に本年度講座の概要についてお書きいただきましたので、ご紹介します。

◆入門編(担当:小松賢司講師)

本講座は、これまでまったく古文書を読んだことのない方を主な対象としています。簡単なくずし字の古文書を読みながら、辞書の引き方や、基本的な字の読み方・くずれ方など、古文書を読むために最低限必要な基礎知識について解説していきます。1期分3回の講座を通じて、まったく初めて古文書に触れた方が、一人で辞書を片手に簡単な古文書を読むことができるようになることを目標としています。

古文書がすでに読める方でも、基礎から勉強しなおしたい方には受講をお勧めします。受講資格の制限などはありません。ただし、講座のスピードや内容は初めての方を基準にさせていただきます。史料は毎回新たなものを用いますが、解説は1期ごとに同じものが繰り返されることになりますので、予めご了承ください。

○使用史料:『旧幕引継書』(主に『市中取締類集』『撰要類集』)

○史料の内容:江戸の町に関する史料を中心に取り上げます。そのため、江戸の町に関する基礎知識について

も適宜解説していきます。

◆初級編(担当:田中潤講師)

本年度から初級編を担当いたします。昨年度までの初級編と同じように、都市「江戸」を中心とした史料を取り上げ受講者の方々と読み進めていくこうと思います。本年度は、今日の東京でもみみることができる恒例・臨時の行事に関わる内容の史料を中心に進めしていく予定です。

○受講対象:基本的なくずし字が読める方。

○講座の進め方:最初に史料を素読し、適宜くずし字の解説を行います。その後、史料内容についての解説を行います。使用史料は事前に1期分(計3回分)を一括して配布し、受講者の方々が受講前に目を通していただいた上で進めていきたいと思います。

○使用史料:『旧幕引継書』を基本史料として、その他の関連する史料も適宜取り上げます。

◆中級編(担当:長坂良宏講師)

昨年度まで初級を担当していましたが、今年度から中級を担当させていた

だきます。

○受講対象:古文書の基本的な読み方がわかり、ある程度くずし字が読める方。

○講座の進め方:最初に史料を素読し、適宜くずし字の解説を行います。その後、史料内容についての解説を行っていきます。使用史料は事前に1期分(計3回分)を一括して配布し、受講者の方々が家庭で予習されてくることを前提に進めていきたいと思います。

○使用史料:江戸町奉行所の史料を中心とした『旧幕引継書』を基本史料として、関連史料も適宜取り入れていきたいと考えています。

○史料の内容:基本的には巨大都市江戸に関する史料を取り上げます。初級でも人宿、日用層、人足寄場など江戸特有の史料を読んできましたが、中級でも同様に江戸特有の史料を読んでいきたいと思います。受講者の方々のご要望あるいは諸般の事情などによっては変更もございますが、その点はご了承いただければと思います。

新事業

「えど友研究発表会」第1回の発表者を募集します

この度、友の会の新しい事業として「えど友研究発表会」を行うことになりました。その主旨は、永年の研究・調査の結果を発表したいという会員のニーズに応えるとともに、質疑応答・討議を通じ会員相互の交流を深め、友の会の一層の活性化に資するというものです。発表テーマは「江戸東京の歴史と文化に関するもの」とし、特定の政治・宗教・信条・事業等の宣伝・広報に類するものは不可とします。また、発表者は友の会会員に限るものとし、

講演料等のお支払いはいたしません。

今のところ、発表者を公募して年1~2回開催、毎回3テーマ程度を予定し、1テーマにつき質疑応答を含め1時間程度とする予定です。ただこれらの開催方法は会員のみなさんの応募状況により適宜検討・対応していくことになります。

ついでに第1回発表会を8月6日(木)午後1時から江戸博1階学習室で行うことになりましたので、発表者を募集します。奮ってご応募ください。

発表を希望する方は、まずはがきに「氏名、会員番号、電話番号、テーマ」と発表会応募の旨を書いて事務局宛お申出ください。

折り返し「えど友研究発表会申込書」をお送りしますので、所要事項を記入の上事務局へご返送ください。同申込書の提出をもって応募といたします。応募締切りは5月末です。

なお、応募多数の場合は調整させていただきますが、その結果については6月上旬に応募者に連絡いたします。

◎活動概況

◆江戸東京を巡る会：3月24日(火)「旧東海道品川宿を訪ねて」のパート1として、八ッ山橋から問答河岸跡、善福寺、法禅寺、養願寺、一心寺、品川宿本宿跡、荏原神社、東海寺(沢庵和尚墓)、品川神社などをめぐり、江戸六地蔵・品川寺から海雲寺までを歴史散策した。参加者25名。

◆落語と講談を楽しむ会：2月3日(火)国立演芸場に集合し、落語、曲芸、漫才、絆曲、奇術など上席(主任は三遊亭小遊三)の演芸を楽しんだ。節分のこの日は終演後出演者全員による豆まきがあった。参加者12名。3月17日(火)武田夏男さん提供の柳家小袁治による落語「金明竹」のDVDを鑑賞した。この噺は関西弁の聞き違いで笑わせるものだが、これはその山形弁バージョンでとても面白く聞いた。次いで山内啓巳さん提供の古今亭志ん朝・桂枝雀両師による落語「愛宕山」のDVDで東西の口演を聞きくらべ、全員で東西の違いなどを話合った。参加者15名。

◆藩史研究会：2月13日(金)小林侃さんにより、現在の千葉市中央区生実町に陣屋をおいていた小藩「下総国生実藩」の歴史について研究発表があった。江戸にもっとも近い藩でありながらほとんど無名で、譜代大名・森川家一族が260余年間転封なし・加増・減封もなしで守りぬいた稀有な藩の興味深い発表だった。参加者

26名。3月13日(金)土屋献一郎さんにより、昨秋友の会のバスツアーで行った関宿藩の歴史について、水防・軍事面の役割、藩主の多くが幕府中枢を担ったこと、利根川と渡良瀬川の流域を開発して石高を増やしたことなどを中心に盛り沢山の資料を駆使して詳細な研究発表があった。参加者は26名。

◆古文書で『八丈実記』を読む会：2月12日(木)、2月27日(金)、3月12日(木)、3月27日(金)に例会を開催。参加者は各10、9、8、7名。

◆江戸御府内八十八ヶ所をめぐる会：第21回として2月22日(日)と2月26日(木)に「第86番金剛山常泉院」(文京区春日)など3ヶ所をめぐった。参加者は各12名、28名。また、第22回として3月26日(木)と4月5日(日)に「第15番瑠璃光山南藏院」(練馬区中村)と第2番金峯山東福寺(中野区江古田)の2ヶ所をめぐった。参加者は各28名、9名。



●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

◆役員会

2月12日(木)13時30分開催。3部会合同会議についての打ち合わせを行った。清水事務局長より総会用資料の配布と説明があった。出席者7名。

3月11日(水)17時開催。役員推薦委員会より、役員候補者の報告があった。21年度の基本方針と総会用の資料について話し合った。出席者9名。

◆事業部会

2月5日(木)17時開催。1月の事業報告と今後の事業の担当者を決めた。会員発表会の実施要領案が検討され決定した。来年度計画の具体案を次回持ち寄ることとした。出席者17名。

3月5日(木)17時開催。2月の事業報告と今後の事業の担当者を決めた。会員発表会の具体的日程案が検討され決定したほか、来年度計画について取りまとめた。出席者18名。

会議・会合日誌

2009 / 2 ~ 2009 / 3

◆広報部会

2月20日(金)14時開催。21年度総会に向けて、議案作りや役員候補などについて話し合った。『えど友』を48号から発行部数を100部増やすこととした。48号の校正と次号の担当について話し合った。出席者8名。

3月20日(金)14時開催。20年度活動報告、21年度活動計画を取りまとめた。『えど友』49号の担当とスケジュールを確認した。出席者5名。

◆総務部会

2月25日(水)13時開催。『えど友』48号の発送業務を行った。総会までの日程を検討したほか、在庫のチェック

クなどを行った。出席者16名。

◆3部会合同会議

2月12日(木)16時開催。江戸博7階「桜茶寮」にて3部会相互の交流をはかった。出席者22名。

◆役員等候補推薦委員会

3月10日(火)17時開催。次期役員等の自他薦が21名あったので絞り込みについて話し合った。出席者7名。

3月31日(火)17時開催。次期役員等の候補者の絞り込み結果について確認・決定した。出席者8名。

◆文政町方書上翻刻プロジェクト

2月5日(木)、19日(木)、3月5日(木)、19日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各8名、8名、8名、7名、(B)各9名、9名、9名、7名。

2月26日(木)ABグループ合同で国会図書館で「町方書上」の原本との照合作業を行った。

百の夢かなう日…東京23区内 の通り」100を歩く

山本 隆

平成20年12月13日15時25分。
天候晴れ。私の8年越しの夢が達成した瞬間であった。記念すべきその場所は、練馬区石神井台のキャベツ畑が広がる一画。幅2メートルほどの小道が富士街道にぶつかる、その角だ。すぐ隣に無人の野菜販売機があるのである場所であった。一見なんの変哲もないこの小道こそが、私の100番目の「通り」の終点である、旧早稲田通りである。

私は8年前から東京23区内の「通り」100を選び、その「通り」100を歩くことを目標にしてきていたが、この日ついに夢の100番目の通りを踏破することになった。

「通り」歩きの目的は体力維持、健康増進だけでなく、江戸・東京の歴史、遺跡に触れる喜びもあるが、何といっても一つ一つの「通り」、「街道」を歩き終わつたという達成感、満足感は何物にもかえがたい。また、100の達成は、私の夢でもあった。

旧早稲田通りは、その名の通り、早稲田通りの本来のルートの一部であったようだ。九段の靖国神社の前を基点とする現在の早稲田通りは、杉並区を西に進み善福寺で青梅街道に合流して



▲旧早稲田通り スタート地点

終わっているが、その昔は、途中の今 の杉並区本天沼2丁目から北上し、西武新宿線下井草駅を通り抜けて今の練馬区石神井台で富士街道にぶつかっていた。江戸時代には富士街道からさ らに北上を続け、所沢まで続いており、古くは「所沢道」と呼ばれていたよう である。沿道の寺社詣でや農産物の輸 送などに重要な役割を果たしていた道 である。

今回私が踏破したのは、早稲田通り から分岐する本天沼町交差点から、富 士街道に合流するまでの6km弱の道 のりである。距離が短いため周辺の気 になる場所も探索しながらのゆったり とした行程になった。

スタート地点の本天沼町交差点には、「ここから旧早稲田通り」という 標識がある。片側が矢印の形をしてい るこの標識は、ここが「通り」の基点 であるということを示している。

歩くこと数分、松下橋という橋に着 いた。下を流れるのは妙正寺川、神田 川の支流である。水源の妙正寺池まで 1km足らずを少し遠回りして、川沿 いにたどってみると。冬枯れのしだれ桜 の小道は静寂に包まれ、深く掘られた 川底をほんのわずかの細い小川がひそ やかに流れているのみである。梅雨時 には増水するというこの妙正寺川もこ の時期は水量が少なく、高田馬場で怒 とうのように暗きよから神田川に流れ 込む姿がうそのようである。

旧早稲田通りに戻りさらに進むと、 小さな稻荷神社、道祖神、観音堂、石 の地蔵尊などが次々と沿道に姿を現 し、旅人たちの無事を見守っている。 江戸の昔、まだこのあたりが荒野だつ たころ、ひたすらに歩を進めた人々の 祈りの思いが伝わる。

先日踏破した新青梅街道を渡り、そ の先の八成橋の交差点で千川通りを渡 る。橋も無いのに橋の地名が?と不思 議に思った次の瞬間、この通りは昔、 千川上水だったのだろうと思い当たつ た。

間もなく環八(環状八号線通り)を 渡ると、その先はしばらく閑静な住宅 地が続く。通りを歩く楽しみには、今 の東京の新しい発見も欠かせない。通 りには普通の人々の日々の暮らしが溢 れている。庭先の小さな置物や、きれ いに手入れされた鉢植えに、そこに住 む人々のこまやかな生活が見え隠れす る。

やがて通りは石神井公園の台地の南 側に沿って、西に大きく曲がってゆく。 台地の南麓には、こんな所にこんな立 派なお寺が、と驚くほどの構えの仏閣 が立ち並んでいた。キリストン石像が 印象に残る「禅定院」、紅葉の映える 三重塔が広い境内にそびえ建つ「道場 寺」と続き、圧巻は「三宝寺」である。



▲道場寺 三重塔



▲三宝寺 御成門

● ● ● ● 東京23区内通り100 ● ● ●

1. 内堀通り	26. 四つ目通り	51. 日光街道	* 2	76. 尾竹橋通り
2. 外堀通り	27. 本郷通り	52. 中山道	* 3	77. 八重洲通り
3. 靖国通り	28. 白山通り	53. 水戸街道	* 4	78. 鍛冶橋通り
4. 中央通り	29. 旧白山通	54. 第一京浜	* 5	79. 浅草馬道通り
5. 昭和通り	30. 不忍通り	55. 第二京浜	* 6	80. 職安通り
6. 新大橋通り	31. 目白通り	56. 産業道路	* 7	81. 小滝橋通り
7. 日比谷通り	32. 新目白通り	57. 青梅街道	* 8	82. 曙船通り
8. 新宿通り	33. 音羽通り	58. 井の頭通り	* 9	83. 奥戸街道
9. 六本木通り	34. 山手通り	59. 甲州街道	* 10	84. 水天宮通り
10. 青山通り	35. 丸八通り	60. 五日市街道	* 11	85. 水道通り
11. 桜田通り	36. 船堀街道	61. 川越街道	* 12	86. 中杉通り
12. 明治通り	37. 江戸通り	62. 笹目通り		87. 篠崎街道
13. 永代通り	38. 國際通り	63. 柴又街道		88. 用賀・西用賀通り
14. 葛西橋通り	39. 大久保通り	64. 千川通り		89. 世田谷通り
15. 清洲橋通り	40. 早稲田通り	65. 千葉街道	* 13	90. 茶沢通り
16. 蔵前橋通り	41. 環七通り	66. 京葉道路	* 14	91. 自由通り
17. 春日通り	42. 目黒通り	67. 墨堤通り		92. 駒沢公園通り
18. 浅草通り	43. 駒沢通り	68. 中原街道	* 15	93. 淡島通り
19. 言問通り	44. 玉川通り	69. 多摩堤通り		94. 昌平橋通り
20. 晴海通り	45. 環八通り	* 1	70. 北本通り	95. 赤堤通り
21. 外苑東通り	46. 海岸通り		71. 高島通り	96. 井草通り
22. 外苑西通り	47. 平和橋通り		72. 環八通り-2	* 16
23. 清澄通り	48. 旧海岸通り		73. 方南通り	97. 人見街道
24. 三つ目通り	49. 池上通り		74. 旧山手通り	98. 富士街道
25. 中野通り	50. 北斎通り		75. 尾久橋通り	99. 新青梅街道
				100. 旧早稲田通り

(注) * 1 (練馬区南田中より) * 2 (草加市長毛川まで) * 3 (戸田市戸田橋まで) * 4 (松戸市新葛飾橋まで)
 * 5 (川崎市六郷橋まで) * 6 (川崎市多摩川大橋まで) * 7 (川崎市大師橋まで) * 8 (西東京市東伏見町まで)
 * 9 (武蔵野市吉祥寺まで) * 10 (調布市仙川まで) * 11 (武蔵野市吉祥寺まで) * 12 (和光市新東埼橋まで)
 * 13 (市川市本八幡まで) * 14 (市川市江戸川大橋まで) * 15 (川崎市丸子橋まで) * 16 (赤羽岩淵より)

三代将軍家光が狩猟の際に立ち寄ったという御成門もある立派な大寺院だ。境内と裏山はかつての豊島氏の居城であった石神井城跡で、この三宝寺は豊島氏の菩提寺でもある。豊島氏は鎌倉時代、頼朝の信頼を得て領地を押しし、石神井城を居城としたが、室町時代に太田道灌と激しい争いの末敗れた。台地上の石神井公園の一角に、空濠の跡も残っていた。

さて、三宝寺脇の石屏に沿って、緩やかな坂を上って台地の上に出ると、のどかな田園風景が広がってくる。練馬の特産物キャベツの畑に吹く武蔵野の北風が肌寒い。たどってきた旧早稲田通りはみるみるうちに狭く入り組んだ路地に入り込み、住宅と畑の混在する複雑な一画を迷路のように進む。そしてついに、富士街道が見えた。100番目の通りの終点は、しかし、あっけないほどに何もなく、旧早稲田通りの

標識すらなかった。いくら探しても、一方通行入口の標識があるのみである。今ここに住んでいる人々は、江戸の昔、ここが旅人たちの通り道だったことを知っているだろうか。

通りを歩くとき、私はそこに吹く風を感じる。今の街の姿を通して昔の情景を思う。そしてそこに風情を感じとする。それは、スピードの時代にあって、一歩一歩歩くことによってのみ、得られるものである。さらに、通りを歩くことによって、江戸東京の街の成り立ちや発展、人や物の動きが、身近な物に思えてくる。

今回100の「通り」は達成したが、これをもとにさらなる夢がまた広がってゆく。100の「通り」歩きの続きを、江戸切絵図や広重「江戸百景」絵などと重ねあわせ、気に入った「通り」を再度、訪ね歩くのも面白い。興味はつきない。

私が100という数字にこだわるのには理由がある。100は簡単に達成できる数ではないが、不可能な数ではない、ということだ。実は他にも100を目指していることがいくつかあるのだが、それを紹介するのはまた別の機会とさせていただきたいと思っている。

夢の実現は、「百里（千里）の道も一歩から」である。目指すものがはるか遠くに思えても、まずは最初の一歩を踏み出すことである。妙正寺川の細い小川が、やがては神田川の流れになり、隅田川へとうねりを続けていくよう、畑の中の小道もやがては街道にはいり、江戸東京の中心地「日本橋」へと続く。私もまた、これからも夢の実現に向けて日々、一歩一歩、確実に進んでいきたい。

なお、踏破した100の「通り」、「街道」は上の表のとおりである。

[長屋の花見]



飛鳥山の足元・音無親水公園の桜

季節が移り葉桜の頃になり、あの花見騒ぎがうそのよう。なんて落語の導入みたいですが…。今回もまた時期ズレ嘶ですいません。花見といえばふつうは桜の下で宴会てえわけですが、同じ花見でも貧乏人は桜の下をただゾロゾロと歩くだけのもので。「長屋中歯をくいしばる花見かな」なんておかしいやら情けないやら。近所でも評判の貧乏長屋、別名「戸無し長屋」とも、そのわけはおまんまと炊く薪代わりにと、戸板を燃しちまったとか。ほとんどが店舗などは溜め放題、なかには親の遺言で払わないなぞという、親子二代家賃無しで居すわってる奴もいるすごい連中です。

それでも気のいい大家さんの発案で、半分は世間への見栄で花見に行くことになりました。しかし本物の酒や料理が調えられるはずもなく、酒はお茶のでがらしを薄めたもの、タクワンが玉子焼き、大根をかまぼこに見立てたもどき酒盛りとなりました。“酒肴”をムシロに包んで今月と来月の月番が担ぎます。浮かれて歩けといわれ「花見だ！花見だ！」とはやせば「夜逃げだ！夜逃げ！」とまぜつかえ。毛氈代わりのムシロに座って乞食のまねをしようとか、歯が悪くて玉子焼きのシッポはかめないと、ボリボリ音の



▶花は桜木人は酒

するかまぼこなど、ギャグの連続です。

「誰か酔いな。そうだ今月の月番、お前が酔え」と、しらふでも酔ったふりさせられ、「辛口や甘口の酒は聞いたことがあるが、渋口っていうのは初めてだ」「この酒は灘や伏見じやなく宇治の酒だね」「たまには焙じた酒もいいよ」など。挙句は「大家さん近々いいことがありますよ、ほら酒ばしらが立っている」貧乏のきわみで底ぬけの明るさがはじけ、破れかぶれのやりとりは理屈ぬきに笑えます。

花見の名所といえば？

上野は寛永寺領でもあり將軍家祖廟に近いので、花見はもっぱら層間のうちだけ、しかも歌舞音曲ははばかられるため、浮かれたい人々は大騒ぎのできる飛鳥山や向島へ繰りだしたそうです。でも小さんは嘶の舞台を上野摺鉢山としていますし、下町の住人がなじみの所といえばやはり「上野のお山」でしょう。しかし花見につきものの酔っぱらいは上野でも健在(?)のようで、有名な秋色桜の俳句の如き雲霧氣もあったわけです。ただ『江戸名所図会』の「清水堂花見図」や広重江戸百景「上野清水堂不忍池」では、なぜか妙に行儀のよい花見客

が描かれています。これも落語同様に建前と本音の妙かな？

知りすぎた上野公園にも

いまさら上野かよ！という向きもありましょうが、そんなことは「畏れ入谷の鬼子母神、びっくり下谷の広徳寺」ということで…まずは観光案内所で『上野公園花マップ』をもらいました。それによればここは約1,200本の桜があり、桜はすべてソメイヨシノと思いまいや、40種もの多種な桜があるそうです。また公園内には数々の史跡や文化施設があり、歴史・芸術・文化の意義深い“聖域”となっています。でも実際に歩くと公園一帯はなぜ



▲落ちた大仏頭

かくすんだ印象で、どんよりした違和感があります。もちろん桜は見事で緑なす木々も大きく立派ですが、その木の葉でさえもなんだかすすけていて、うす汚れたような雲霧氣がしてなりません。一見整備されているようで、実は無秩序な空間だからでしょうか。古い江戸東京を愛した池波正太郎は「上野で彰義隊がほろびたとき、江戸文化もほろびた」と断言しています。維新後に他国からいろんな人が東京へ入り込んで、それまで江戸っ子が大切にしていたものを、力づくで破壊してしまったと嘆いています。ここはその破壊現場の跡なのかもしれません。

公園の中ほどに「ボードウイン博士像」があります。オランダの医師として幕末から明治初年にかけ日本の医学生たちを教導し、焼け野原の上野に医学校と病院を建設せんとする計画をおしとどめ、日本初の公園建設を推奨した人物のこと。昭和48(1973)年に公園開設100周年を記念して胸像を建てましたが、なんと弟と間違ってしまい、平成18年によるやく本人の胸像に建直したという、すこしほほ笑ましい話。落語に通じるこういうユルめの話が好きです。さらにユル過ぎて呆れるのは、上野大仏なるものがあり、パゴダの脇に落首した仏頭があります。昔から「首が落ちるなんざあ縁起が悪い」と一番忌避すべきことなのに、近頃のバカ受験生は「これ以上落ちない」ってんで、無知なりにこの落ち首を有難がり合格祈願するらしい。

花見の騒ぎに疲れたらおなじみ精養軒へ、横山大観の墨絵が見られます。そうそう上野に来るといつも思うのですが、もう一度「永藤たまごパン」が食べたいなあ。

【取材】文・写真：広報部会・稻垣武志
イラスト：同・松原良

催事案内

古文書講座

新年度は5月から開講

古文書講座の新年度第1期は5月から下記日程で開講します。

各講座の概要等については6ページをご覧ください。

◆入門編

- ・講師：小松賢司さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：5月13日（水）、6月3日（水）、7月1日（水）
- ・時間：A講座は10：30～12：30
P講座は14：00～16：00

◆初級編

- ・講師：田中潤さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：5月20日（水）、6月17日（水）、7月15日（水）
- ・時間：14：00～16：00

◆中級編

- ・講師：長坂良宏さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：5月16日（土）、6月20日（土）、7月18日（土）
- ・時間：14：00～16：00
- ・会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1、2
- ・定員：各講座とも80名（会員のみ）
- ・参加費：各講座とも全3回1,500円（初回一括払い）
- ・申込締切：各講座とも申込は締切りました。

【企画担当責任者】上田太一（事業部会）

友の会セミナー

第81回「旗本の園芸文化」

講師 平野 恵さん

（台東区立中央図書館 郷土・資料調査室専門員）

◆江戸時代後期、植木屋は商品として、本草学者は学問の対象として、植物に関わり、世界に通用する園芸文化を育んできました。しかしながら、こうした江戸の園芸文化の発展をささえた存在として愛好家ぬきには語れません。今回は数ある愛好家のうち、特に“旗本”という身分に注目し、美しい図譜を作ったり、自宅で園芸品評会を開いたりするなど“趣味の園芸”的世界とその歴史的意義についてお話しいただきます。

○講師略歴：ひらの・けい

昭和40(1965)年生まれ。総合研究大学院大学博士後期課程修了。博士（文学）。文京ふるさと歴史館を経て現職。ほかに国立歴史民俗博物館くらしの植物苑展示プロジェクト委員、明治大学兼任講師も務める。著書に『十九世紀日本の園芸文化』（思文閣出版、2006年）、共著に『江戸・東京近郊の史的空間』（地方史研究協議会、2003年）など。
・開催日：5月23日（土）14：00～15：30
・申込締切：5月14日（木）必着
・会場：江戸東京博物館・1階学習室1、2
・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
・参加費：会員500円・同伴者600円（当日払い）

【企画担当責任者】小林侃（事業部会）

友の会特別観覧会

特別展「写楽 幻の肉筆画 ギリシャに眠る日本美術～マノスコレクションより」

◆2007年に旧市街が世界遺産に登録されたギリシャのコルフ島にある国立コルフ・アジア美術館には、19世紀末一人の外交官・グレゴリオス・マノス氏が全財産をかけて収集した日本美術の膨大なコレクションがあります。昨年7月、日本の研究者によるこのコレクションの大々的な学術調査が行われ、写楽の肉筆画が発見されるなどギリシャに眠る秘宝の全貌が明らかになりました。今回はその成果を紹介する特別展で、特に真筆と確認されている写楽の肉筆画が一般に公開されるのは、世界で初めてのことです。担当の我妻直美学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- ・開催日：7月10日（金）17：00～19：00
- ・申込締切：6月30日（火）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階ホール／企画展示室
- ・定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員500円・同伴者700円（当日払い）

【企画担当責任者】松原良（事業部会）

〔注〕企画展「発掘された日本列島2009展」の内覧会は今回開催の予定はありません。

第82回「江戸の旅—その驚くべき実態と観光旅行の諸相」

講師 菅野俊輔さん

（江戸歴史文化研究家、早稲田大学エクステンションセンター講師）

◆江戸の後期（19世紀）になると男性ばかりでなく女性も長期旅行をする「観光旅行ブーム」が現出していました。大人気の旅行「伊勢参り」ブームの仕掛け人「御師」が考案した見事なからくり、東西を結ぶ大動脈・東海道を例に宿場・名所・名物など旅の楽しみ、お江戸めぐりから京・大坂まで「三都」の観光案内、『西遊草』にみる驚異の大旅行（山形県鶴岡から山口県岩国）の様子など、江戸社会の驚くべき旅の実態、観光旅行の諸相をお話いただきます。

○講師略歴：かんの・しゅんすけ

江戸歴史文化研究家。早稲田大学エクステンションセンターやNHK学園で古文書塾の講師を務めながら、江戸のエコ生活、江戸の旅、お江戸めぐりなど〈江戸の本〉の刊行にはげむ団塊の世代。主な編著に『書いておぼえる江戸のくずし字いろは入門』（柏書房）『図解江戸の旅は道中を知るとこんなに面白い！』（青春出版社）など。

- ・開催日：6月27日（土）14：00～15：30
- ・申込締切：6月18日（木）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階ホール
- ・定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員500円・同伴者600円（当日払い）

【企画担当責任者】松原良（事業部会）

見学会

「知られざる浅草をめぐる」

◆浅草というと雷門から仲見世を通って浅草寺参詣で帰ってしまう方が多いようですが、実は浅草寺の境内とその周辺には多くの史跡、文化財があります。今回はそうした“知られざる浅草”をご案内します。例えば、「花の雲鐘は上野か浅草か」の句で有名な時の鐘がある弁天山、新門辰五郎が勧請した被官稻荷、都内最古の木造建築・六角堂、そして懐かしい浅草の雰囲気にひたることのできるテプロ浅草館などなどです。どうかご期待ください。

今回は現地での混雑を考慮し比較的小人数で3回実施することにしました。第1～3希望日をそれぞれ明記してお申込みください。応募多数の場合は調整させていただくことがあります。

- 開催日：7月3日(金)、7月4日(土)、7月7日(火)
各日とも12時45分集合、13時出発
- 集合場所：浅草雷門向い 浅草観光会館前
- 申込締切：6月16日(火)必着
- 定員：各日とも50名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)
【企画担当責任者】岩松精(事業部会)

お申込方法

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。

◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いく！

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

●生誕80周年記念特別展

好評開催中！

「手塚治虫展

～未来へのメッセージ～

会期 2009年4月18日(土)～6月21日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし5月4日(月)、11日(月)、18日(月)は開館、5月7日(木)は休館

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

*中学生以下は無料、高校生は65歳以上と同じ

次回予告

●日本・ギリシャ修好110周年記念特別展

「写楽 幻の肉筆画

ギリシャに眠る日本美術

～マノスコレクションより～

会期 2009年7月4日(土)～9月6日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし7月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)は休館

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

*小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

企画展のご案内

●企画展

好評開催中！

「東海道五拾三次

～あの浮世絵がやってきた～

会期 2009年4月1日(水)～5月10日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

●次回企画展

「市民からのおくりもの2009

～平成20年度収集新収蔵品から～

会期 2009年5月16日(土)～6月7日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

●次々回企画展

「発掘された日本列島2009展」

会期 2009年6月20日(土)～8月2日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

会報<えど友>第49号

平成21年5月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長：松原良 副編集長：菅沼和男 発行人：佐藤幸彦(副会長)

編集人：岡橋園子、稻垣武志、岡田守弘、岡本静雄、深尾恵美子、福島信一、小松美幸、松田悠美子、中里弘子

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910